



多文化社会学部

長崎大学

Nagasaki University
School of
Global Humanities
and
Social Sciences

社会動態コース

問題発見のスキルを体系的に学び

「調べる力」を現場で磨く

フィールドには可能性がいっぱい

長

い歴史において、ヒトやモノや情報は常に移動を繰り返してきました。そ

して、世界のどこかの小さな変化が、別の場所で大きな変化をもたらしたりします。そうした社会の変化を「社会動態」と言います。このコースには社会のフィールド経験が豊かな先生方が多く在籍しています。一九九〇年代から北東アフリカにあるエチオピアの辺境の村に住み込んで、文化人類学の現地調査を行ってきた増田研准教授にお聞きしました。

「このコースではフィールドワークがテーマ。フィールドとは『現場』のことです。学問をする場所には書斎、ラボや実験室、そして現場の三つがあります。そこに行かなければ調べられない、現場での調査は多くの研究分野で

とても重要です。子どもの頃、夏休みの宿題でアサガオやヘチマの栽培観察があったでしょう？ しかしフィールドワークでは、植物ではなく、生身の人間と対話し、心を通わせる必要があります。地域社会全体に目配りし、柔軟に対応する。現場でタフに動ける人材の育成を目指すため、教員は全員、フィールドワーカーです。例えば、結婚して日本に移住した女性たちを調査している賽漢卓娜先生や、日本や中国で移民と越境文化の調査をしている南誠先生がいます」。

おわかりのように、何かを調べるスキルや分析する力、専門外の人を説得できる論の立て方は、論文作成や研究だけでなく、通常の仕事にも大いに役立ちます。例えば現場で何が問題なのかを探るとき、グループディスカッションで自由におしゃべりしてもらったり方があります。その会話のなかからどんな問題が潜んでいるのかを浮き上がらせていく。私は『どつと網をかける』という言い方をしますが、そこで獲れる魚(問題)の種類を分析し、そこから絞り込んでいくわけです。こういったスキルや調査の方法論の教育は、海外の大学ではきちんと確立されていますが、日本の大学の文系ではあまり体系的に教えられてきませんでした」。

めめ体系的なスキルですね。「しかも、それらを学んだ学生をなるべく多く海外に送り出して、現場で実習させます。それはライセンス的な学びではなく、仕事に就いたその先で、難しい場面でもくじけずにタフにこなすためのコミュニケーション力と実践力を養成するわけです」。

フィールドワークモジュールでは、問題を発見し解決するプロセスに必要なリサーチ・スキルを学びます。例えば、図書館の資料やデジタル素材の情報収集。ともすれば、ネット検索にたよりがちになるところを、体系的な調査手法を知ること、論文作成や仕事の現場で役立ちます(アライヴ実習と映像・デジタルアライヴ実習)。またアンケート調査の基礎や統計の分析(サーベイ基礎実習)、状況に応じたインタビューの手法(インタビュー調査基礎実習)など「調べる力」を多角的に学び、スキルを身に付けます。また、海外フィールドワークで調査の実践を経験することにより、現場での応用力を高めることもできます。

Interview



増田 研
Masuda Ken

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科/大学院国際健康開発研究科 准教授 1968年神奈川県生まれ。博士(社会人類学)。専門はアフリカ民族誌研究。「武装する周辺—エチオピア南部における銃・国家・民族間関係」(『民族学研究』65-4)などにより、第8回日本ナイル・エチオピア学会高島賞受賞。

Column

フィールドワークモジュール

このモジュールは、「フィールドワーク入門」「フィールドワーク基礎実習」「アライヴ実習」「映像・デジタルアライヴ実習」「サーベイ基礎実習」「インタビュー調査基礎実習」「海外フィールドワーク実習」の七科目から構成されており、最初の入門と基礎実習の二科目は全コースの学生が必修、四つの実習科目については、そのうち二科目を選択します。また、更に高度な実習を希望する学生は海外実習を受講することもできます。



Message

賽漢卓娜

サイハンジュナ

異文化と家族担当予定者



結婚移民を通して 社会の動きを探る

私のもともとの学術的な関心は、ある地域や社会における少数民族(エスニック・マイノリティ)の置かれた状況や主観的な帰属意識(エスニシティ)がどのように変容するのかという点にありました。これらを学ぶうちに、国際結婚をし、海外に移住した女性結婚移民のダイナミックなプロセスを、「移動」と「家族」というキーワードで研究するようになりました。

女性結婚移民は、一見、一女性の個人的な経験に過ぎない微々たる出来事のようにですが、村、地域、国、東アジアを超えたグローバルな人の移動が一つの潮流になると、そこから共通した社会問題が見えてきます。女性の結婚移動を通して、母国と相手国両方の国内地域格差、職業格差、性差別、民族差別などが顕わになります。女性はなぜ生まれ育った故郷を離れるのか、異国でどのような家族を築くのか、どこが終の棲家になるのかといった点は、移民研究、ジェンダー論、教育社会学、家族社会学の知識を総合的に駆使することで初めて明らかにできる、興味深い課題です。

グローバリゼーションの進行する現代社会において、人々はこれまでにない規模で世界を移動し、容易に国境を越えるようになりました。日本も例外ではなく、人的移動が増加し、それに伴っていわゆる国際結婚の事例も多くなりつつあります。多文化共生や異文化理解が、私たちにとってもっとも親密な場である家族においても重要となっているのです。私が担当する「異文化と家族」では、現代グローバル社会における家族の異文化状況に関する基礎知識と、それに関わる諸問題を学びます。主に私が長期の現地調査に従事した日本、中国、韓国の事例を取り上げ、家族文化の多様性について考えます。家族を「常識」から問い直し、男性と女性の関係の在り方、グローバルに広がる不平等を検討していきます。

皆さん、大学でこそ、空気なんか読まずに、勇気を持って、この世界の豊かな多様性の真実を学んでいきましょう。